

バイリンガル教員として地域の子どもたちと



平成24年度文化庁日本語教育大会

群馬県太田市立九合小学校 バイリンガル教員 坂本 裕美

群馬県太田市立太田小学校・南中学校バイリンガル教員 伊藤由佳

平成24年8月31日

バイリンガル教員の役割

1. 日本語初期指導

- 教科指導、適応指導、生活指導、放課後指導、進路指導、心のケア



中学校の先生が中学校説明会を行う

バイリンガル教員の役割

2. 親への支援

翻訳

（お知らせ・連絡帳等）

通訳

（電話対応、家庭訪問、
保護者会等）

→親への学校参加を促す

常時いることで、きめ細かい
対応が可能。



小学校の高学年と保護者が中学生と交流会
中学生生活についての説明会

Vamos Papear の活動

- 設立：2009年3月
- 活動：毎週土曜日 14:00～16:30
- 場所：太田市国際交流協会
- スタッフ：ボランティア
（国際教室関係者、国際交流協会の職員、
ブラジル人学校教員）
- 連携：東京女子大学の学生団体と協働実践
- 人数：20～30人

目的：公立小中学校に通う、ブラジルにルーツを持つ児童生徒の母語・母文化を保持するとともに、地域社会を意識し、つながりをもたらすこと。



□ 母語・母文化保持の必要性

アイデンティティの観点から(ケース事例)

8年前、6年の男子が、日本語が話せない母親が恥ずかしいので、母親と話さなくなった。

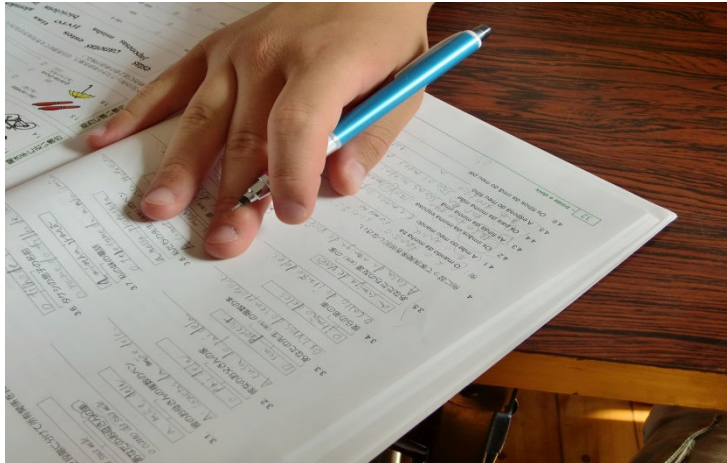
「自分は日本人になる」と。ブラジル人であることがいやだった児童を指導した経験

〈母親が通知表に書いたコメント〉

「うちの子の態度がものすごく変わりました。・・・ブラジルのテレビ番組に興味を示さなくなり、日本語のテレビしか見ようとしません。・・・最近、母語であまり話さなくなりました。・・・最近、母語で話すのが恥ずかしくなってきたように感じます。」

→自尊心を育て、自信につなげるための母語・母文化保持

活動内容の紹介



□ 14:00～15:30

ポルトガル語の学習

ブラジルの教材や外国人向けのポルトガル語教材を使い、習熟度別に学習を進めている。

□ 15:30～16:30 課外活動

課外活動

□ 2012年 プロジェクト・活動内容

- 1月 日本語スピーチコンテスト準備(スピーチ)
- 2月 日本語スピーチコンテスト準備(ダンス)
- 3月 日本語スピーチコンテストに参加
- 4月 誕生会
- 5月 母の日
- 6月 田舎祭り・フェスタジュニナ
- 7月 大学見学・太田祭り
- 8月 父の日・夏休みレクリエーション
- 9月 かかし作り
- 10月 藪塚かかし祭り
ブラジル・子どもの日(シュハスコ昼食会)
HOP八木節コンテスト
- 11月 発表会の準備
- 12月 フェイジョアダの会、性教育・AIDS感染について、(Araujoさん・来日)
国際交流フェスティバルに参加(ダンス)
自己発言発表会・クリスマス会



① 母国の習慣・文化、 自分のルーツを知ること



② 地域のブラジル人学校や コミュニティと交流



③ 今住んでいる地域の習慣や文化を知る



藪塚かかし祭りに電車で出かける

つながり・・・読み聞かせから折り紙へ



つながり

母語保持教室から小学校へ



つながり ブラジルの絵本 やんちゃなマルキーニョ

ブラジルの絵本 翻訳者の声で

太田・九合小で読み聞かせ

多くの外国人の子も通う太田市立九合小学校で16日、ブラジルの絵本の翻訳者が自ら読み聞かせをして、子どもたちと交流した。

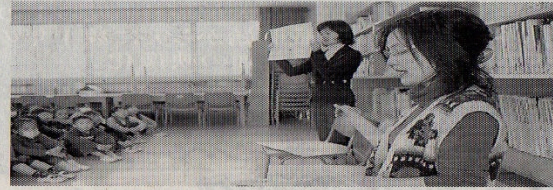
昨年出版された「やんちゃなマルキーニョ」（静山社）を翻訳した松本乃里子さん（55＝東京都。同書は98年にブラジルで出版され、世界で350万部が売れるロングセラーだが、日本語の翻訳は初めてという。児童約600人の同小には、ブラジルなどから国2人の外国人児童がいる。松本さんは、外国人保護者や地元グループの母語保持学級活動に参加した縁で、今回の読み聞かせにつながった。

この日は授業前の「朝の活動」で、図書室に集まった2年生約100人を前に、同書のいくつかの場面を読み聞かせた。

ユーモラスな場面では子どもたちから笑いも。子どもたちは「マルキーニョがすてき」「おもしろかった」と言い合った。

松本さんは「物語を初めて聞く日本人の子も、お話を知っていたブラジルの子も楽しんでいた。すばらしい時間だった」と語った。

中村利光校長は「子どもたちが、互いの文化を知り認め合うことが大事」と話した。



自ら翻訳したブラジルの絵本を読む松本さん（手前）＝太田市飯塚町の市立九合小学校

ブラジルの本で交流

太田・九合小で翻訳の松本さん

ブラジルで親しまれている児童書『やんちゃなマルキーニョ』を

日本語に翻訳した松本乃里子さんが16日、太田市の九合小（中村利光校長）を訪れ、朝の読み聞かせの時間を使って2年生100人と交流した。

ブラジル国内で世代を超えて読まれている同書は、一人の男の子が悩みながらも、元気に日々を過ごして、

すてきな大人へと成長していく物語。松本さんの手で初めて日本語に訳され、昨年12月出版された。

ブラジル人児童が多く通う同校でバイリンガル教員を務める坂本裕美さんが在日ブラジル人小中学生を対象に「母語教室」を開いており、ここに松本さんが参加、交流があったことから、今回の読み聞かせが実現した。

松本さんの語りに、



読み聞かせで児童と交流を深める松本さん（右）

「・・・マイノリティの子どもやその親が母語や母文化を紹介し、周囲と共有するような活動も、広く行われるようになってきました。これらの実践は、周囲の社会の関心を得ることで、マイノリティの子どもたちの自尊心と学習動機を高めるだけでなく、外国語といえは英語、と考えがちなマジョリティの子どもたちに多言語多文化意識を育むことにも貢献しています。」

AJALT特集「ことばと文化をうけつぐ
—越境時代の母語・継承語教育—」より

バイリンガル教員と言えるのは 公立学校のみに通う子ども

- 日本語の上達が早い。
- 日本の学校システムに順応しやすい。
- 母語で細かい感情や悩みなどを親に伝える事ができなくなる傾向が強い。
- アイデンティティーの形成において自分が「迷っている」ことに気が付けない。
- このことをこどもが意思表示をしていても、それを周り(友達・教職員)がキャッチしづらい

Vamos Papearに通う子どもたち

- 母語・日本語の両方を受け入れる土台を持っている。
- アイデンティティーの形成において「自分」を見失うことのないように導く機会がある。
- 常に日本語とポルトガル語が交錯する環境にすることで、使う言語の変換が早くなる。
- 相手に合せて言語を変換する、そのレベルを調整するという対応が自然とできるようになる。

最後に・・・

- 「母語保持＝日本社会への適応・理解の遅れ」と、捉えられがちだが、自然に身につけた母語をしっかりと保持することで、思考言語を育むことになり、日本語学習・教科学習の助けになるのではないか。

最後に・・・

- それとともに、子どもたちの母語保持の活動は、日本社会の理解につながる言語資源の増加という効果を期待できるのではないか。
- そして、母語保持活動は近年導入されている「国際理解教育」において重視されている、「相手を知り、相手の価値を尊重し、自分の価値を高める」という理念に基づいた現場のひとつでもあるといっても過言ではないだろう。